［報告］

若年層献血推進のため岡山県学生献血推進連盟の協力を得て実施した献血模擬体験イベント

岡山県赤十字血液センター[1)]，岡山県学生献血推進連盟“S.B.D.Momo”[2)]
水畑太輔[1)]，劒持雅子[2)]，西村優希[2)]，千原祥平[1)]，廣江善男[1)]，村上文一[1)]，
櫻井　聡[1)]，内藤一憲[1)]，冨田徳子[1)]，為本朋子[1)]，川元勝則[1)]，池田和眞[1)]

Blood donation simulation events for young generation to familiarize blood donation in corporation with Student Union for Promoting Blood Donation

Okayama Red Cross Blood Center[1)], *Okayama Student Union for Promoting Blood Donation*[2)]
Daisuke Mizuhata[1)], Masako Kenmotsu[2)], Yuki Nishimura[2)], Shohei Chihara[2)],
Yoshio Hiroe[1)], Fumikazu Murakami[1)], Satoshi Sakurai[1)], Kazunori Naito[1)],
Noriko Tomita[1)], Tomoko Tamemoto[1)], Katsunori Kawamoto[1)] and Kazuma Ikeda[1)]

抄　録

少子高齢化を迎え，血液事業においては若年層献血推進が最重要課題となっている。そこでわれわれは献血模擬体験を通して献血可能年齢に満たない子供たちにキッズ献血を，献血未経験の高校生にLet's Try MOGI献血（以下，MOGI献血と略す）を実施した。いずれも岡山県学生献血推進連盟（以下，学生連盟と略す）加盟者が血液センター職員より事前指導を受け，当日は白衣を着用して，参加者の受入を行った。キッズ献血は大型商業施設等のイベント会場，MOGI献血は青少年赤十字（以下，JRCと略す）加盟高校文化祭で行った。キッズ献血は2012年より取り組みを開始し，３年間で延べ3,791名の子供たちの参加を得た。MOGI献血は2014年にJRC加盟３校で行い，555名の参加を得た。キッズ献血は集客のある週末に実施したことが多くの参加者を得た要因と考えられ，他のイベントへの出展依頼にもつながった。MOGI献血は，学生連盟がキッズ献血で得た知識と技術をJRCに指導し，協同して活動する機会となった。今後も若年層献血の普及啓発を学生連盟と共に積極的に活動したい。

Key words: promoting blood donation to young generation
(Young group blood donation promotion),
blood donation simulation events (experience),
Student Union for Promoting Blood Donation

論文受付日：2016年２月29日
掲載決定日：2016年11月30日

【はじめに】

少子高齢化を迎え，献血可能人口が減少している現在の血液事業[1]においては，若年層献血推進が最重要課題となっている。2011年に厚生労働省が献血未経験者を対象に行った調査[2]によると，若年層が献血をしたことがない理由として，１位の「針が痛い」に次いで「なんとなく不安」,「恐怖心」,「健康上できないと思った」など，正しく理解されれば払拭できる理由が上位を占めた。われわれは，献血とその必要性に関する正しい知識と理解の普及を目的として，20歳未満の若年層に対し，採血を伴わない「献血模擬体験」イベントに取り組んだので報告する。

【方　　法】

献血可能年齢に満たない子供たちには「キッズ献血」を，献血可能年齢に達している高校生には「Let's Try MOGI献血（以下，MOGI献血と略す）」を実施した。

キッズ献血：

「キッズ献血」は厚生労働省が実施している「楽しく学ぼうキッズ献血」[3]を参考に，2012年より取り組みを開始した。岡山県独自の方法として，事前に血液センター職員（事務職員，看護師）から技術等の指導を受けた岡山県学生献血推進連盟“S.B.D.Momo”（以下，学生連盟と略す）が医師，看護師に扮し，実際の献血と同様に，受付，問診，事前検査，採血，休憩（キッズ献血カード発行）を行った。楽しい雰囲気が伝わるような会場づくりを行うため，けんけつちゃんのイラストが入った横断幕，ベッドカバー，けんけつちゃんの耳のペーパークラフトを作成した。一方，楽しさを演出しながらも本格的な献血体験をするため，血圧計や聴診器等も準備した（**図１**）。当初は人の集まる大型ショッピングモールを会場としていたが，県内各地の子供たちに献血に触れる機会を提供するため，規模が小さな子ども向けイベント会場等でブース展開も行った。形式はオープン採血型を主に展開していたが，実際の移動採血バスを持ち込んだ移動採血型も実施した。また，広いブースが確保できる会場においては，「学生連盟から子供へ」だけでなく，「子どもから子供へ」の献血の普及啓発ができるよう，お仕事体験「キッズドクター・キッズナース」も実施した。これは，献血模擬体験を終えた子供たちの中から希望者を募って実施したもので，事前に準備した子供用白衣，看護衣を着用のうえ，学生連盟のサポートを受けながら，血液センターの献血者受入業務を体験してもらった（**図２**）。

血圧計・聴診器・けんけつちゃん耳ペーパークラフト　　白衣・看護衣・けんけつちゃん

横断幕　　ベッドカバー

図１　事前準備

血圧測定

事前検査

採血

記念撮影

図２　キッズドクター・キッズナース

Let's Try MOGI献血：

献血未経験の高校生を対象とした「MOGI献血」は，「キッズ献血」を参考に2014年に初めて実施した。「高校生から高校生へ」献血に関する普及啓発ができるよう，事前にJRCの部員には血液センター職員が献血セミナーを実施した。また，学生連盟は「キッズ献血」で習得した知識と技術を活かして模擬献血の受入手順等の指導をJRC部員に行った。県内のJRC加盟高校３校の文化祭開催時に，オープン採血型２校，移動採血型１校の形式で行った。会場には部員手作りの横断幕等を掲げ，華やかで親しみやすいイベント会場としての雰囲気作りを行った（**図３**）。キッズ献血と同様に，受付，問診，事前検査，採血，休憩（MOGI献血カード発行）のそれぞれの場所に，医師，看護師等に扮したJRC部員を配置し，学生連盟のサポートを受けながら模擬献血を行った。献血可能年齢に達している参加者に対しては，部員が作成した献血啓発用パネルを展示し，献血の必要性を伝えたうえで県内の献血会場の案内をあわせて行った。

【結　　果】

キッズ献血：

「キッズ献血」は2012年から2014年までの３年間で７回（11日間）実施し，延べ3,791名の子供たちの参加が得られた（**表１**）。学生連盟からは延べ285名の協力があった。学生連盟の学生には，「その日に必要な血液を集めるだけではなく，このような啓発イベントを通してより多くの方に献血を知ってもらうことも大事な活動」という認識ができ，献血に関する普及啓発活動の必要性を強く感じる機会となった。「キッズ献血」に参加した子供たち全員にプレゼントした「けんけつちゃんの耳のペーパークラフト」は，模擬体験終了後も着用した多くの子供が会場内で見られ，広報としての有効性が示唆された。また，イベント主催者が配布している広報物にもキッズ献血の様子が掲載され，イベントを盛り上げる役割も果たすこともできた。記入スペースが確保できる会場のみの

オープン採血型

移動採血型

展示用パネル

横断幕

図３　MOGI献血

表１　献血模擬体験参加者数

名称＼年	2012	2013	2014	合計
キッズ献血（人）	1,186	1,642	963	3,791
Let's Try MOGI献血（人）	実施なし	実施なし	555	555
（人）	1,186	1,642	1,518	4,346

（キッズ献血は，参加した子供）

調査（計2,170名）であるが，来場者へのアンケート結果では，全体の53.4％が「楽しかった」，30.8％が「献血のことがわかった」，26.8％が「今後献血をしたい」と回答し，将来の献血協力に期待の持てる内容であった（**表２**）。

Let's Try MOGI献血：

「MOGI献血」はJRC加盟高校３校で３日間実施し，高校生を中心とした555名の参加者を得た（**表１**）。参加者へのアンケート結果では，「献血についてよくわかりましたか？」に対して「はい」と答えた方が全体の99.0％，「JRC部員の対応はどうでしたか？」に対して「良かった」が99.0％，「今後献血をしようと思いますか？」に対しては90.0％の方が「はい」と回答した。自由記載への記入は「これまで献血のことをよく知らなかったが，この体験で知ることができた」，「毎日輸血を待っている病気の患者さんが全国で3,000人もいることを知ったので，献血をしてみようと思った」等，実際の献血につながる内容が大半であった。しかし，中には「所要時間が長かった」等の指摘もあった。今後改善すべき点はあったが，両イベントで延べ4,346名の参加を得ることができた（**表２**）。

表２　アンケート結果

①キッズ献血	はい（人）	構成比（%）
楽しかったですか	1,400	53.4
献血のことがわかりましたか	831	31.7
16歳になったら献血をしますか	703	26.9

回収枚数：2,620枚

②MOGI献血	はい（人）	構成比（%）
献血についてわかりましたか	296	99.0
JRC部員の対応はどうでしたか	（良い）296	99.0
今後献血をしようと思いますか	269	90.0

回収枚数：299枚

【考　　察】

「キッズ献血」は３年間で延べ3,791名の子供たちの参加を得ることができた。いまだ３年間の実績しかないが，多くの参加者が見込める大型ショッピングモールでの開催をきっかけに，子供を対象としている地域のイベントへの出展依頼もあり，普段献血に触れる機会のない子供たちへの献血啓発として有用であると考えられた。とくに固定施設近隣で行われたイベントでの開催には，保護者に対して固定施設の案内をすることもできた。これまで街頭献血などでの協力への呼びかけが大半であった学生連盟の活動が，将来の献血者の育成につながる普及啓発活動にも広がり，学生自身が新たな活動としての喜びと達成感を得ることができた。また，キッズ献血などの実施により多くの人が学生連盟の活動を目にする機会が増え，献血推進団体としての認知度も高まってきたと思われる。

一方，「MOGI献血」は初めて実施したイベントではあったが，JRC部員に対する事前の研修や準備を周到に行ったことで，部員一人ひとりが必要な知識を身につけ，多くの方に献血の普及啓発をすることができた。また，岡山県では長年遠ざかっていた学生連盟とJRCが協同して活動することにより，献血ボランティアが高校生活だけで終わらず，大学生になっても継続できる活動であることを理解する良い機会となった。

【今後の課題】

「キッズ献血」は大型ショッピングモールでは同一会場で数回実施しており，今後は参加経験のある子供たちも楽しめるような新しい展開が課題となっている。また，県内各所で行われている地域のイベントにも目を向け，県内の他の地域の子供たちへ献血に関する普及啓発を行う機会を増やすことが必要であると考えられる。

「MOGI献血」はJRC加盟高校３校で実施したが，いずれも学内献血の実施には至っていない。今後も生徒のみならず教職員にも理解を得るために，とくに高校献血を実施していない学校への働きかけが必要と考えている。

いずれのイベントにおいても，職員，ボランティアが「献血の正しい知識を伝えるスキル」を身につけることで，「不安」や「恐怖」を払拭し，実際の献血につなげることが可能と考えている。今後は低年齢層，高校生だけでなく，献血可能年齢を間近に控えた中学生への啓発にも取り組む必要がある。

また，平成26年12月２日付で厚生労働省から出された「献血推進に係る新たな中期目標～献血推進2020～」[4]では若年層の中に新たに30歳代が加えられた。「キッズ献血」参加者の保護者が多く該当すると考えられるため，子供と同時に保護者への啓発にも目を向け，「献血推進2020」の各年度別目標値を達成できるよう取り組んでいく必要があると考えている。

文　　献

1）【総計】平成26年住民基本台帳年齢階級別人口　総務省
2）若年層献血意識調査―結果報告書―平成23年10月厚生労働省医薬食品局血液対策課
3）平成26年度血液関係中国・四国ブロック会議資料　平成25年度「模擬献血体験実施結果報告書」子ども霞が関見学デー
4）献血推進に係る新たな中期目標～献血推進2020～　厚生労働省